

※令和7年度より四半期毎の掲載となります。
次回掲載は7月号を予定しています。

初めての国際会議PMACを通して学んだこと

国立健康危機管理研究機構

国際医療協力局 河原崎 彩佳

(国立国際医療研究センターは令和7年4月1日から国立健康危機管理研究機構に組織改正)

憧れの国際医療協力の世界へ

私は高校生の時、タイの孤児院を訪問するスタディツアーに参加しました。それが私にとって初めての低中所得国訪問であり、国際協力の道を歩むきっかけとなりました。スタディツアー参加中に、これが私の進みたい道だと確信したことを今でもはっきりと覚えています。健康に対する意識や知識の不足が原因で、本来予防可能な疾病にかかり、命を落とす人がいるという現地での話が忘れられず、看護の道を目指し感染症を学びたいと考えたのもこの時でした。

6年間国立国際医療研究センターACC（AIDS Clinical Center）病棟で勤務した後、2024年4月に同センターの国際医療協力局に異動しました。国際協力の世界は私が想像していた以上に多岐にわたり、日々新たな学びを得ています。当初、私は「現地に赴き、現地の人々と協働しながら、その国の発展に寄与すること」が国際医療協力の在り方であると考えていました。しかし、私が見ていた活動は公にされている活動のほんの一部であり、そこに至るまでには、時代に即した知見を得て学び続け、それを活用しながら試行錯誤を重ねる人々の努力と信念があるということを、日々実感しています。

PMACへの参加

2025年1月に参加したマヒドン王子国際保健会議（Prince Mahidol Award Conference、以下PMAC）はまさに時代に即した新たな知見を得る機会の一つでした。PMACは2017年から毎年タイ・バンコクで

実施されている保健医療分野の国際会議であり、世界中から国際保健の専門家や研究者が集まり、優先度の高いグローバルヘルス問題について議論する目的で開催されています。今年は「医療のデジタル化」が取り上げられ、テーマは「AIの時代における技術の活用で、より健康的な世界を築く」でした。さらに、この会議ではラポーターという役割を募集しており、今回、私はその一員として参加する機会をいただきました。ラポーターは、担当する会議の議事録をメンバーと協力して作成し、運営へ提出する役割を担います。提出した議事録は運営側で取りまとめられ、最終日にサマリーとして発表されました。

初めての国際会議、初めてのラポーター

PMACはサイドミーティング、メインカンファレンス、フィールドトリップ、サマリーの4つの構成となっており、6日間にわたり実施されました。ラポーターはこのうち2日間のメインカンファレンスにおいて、提示されたフォーマットに沿った議事録作成を任されました。今年の新たな取り組みとして、会議内容をAIで文字起こしし、議事録作成時に課題が生じた際の補助として活用しました。さらに、議事録の作成にとどまらず、カンファレンス後にラポーター間で意見交換を行う時間を設けていたことも、今年からの新たな取り組みの一つでした。デジタル化が進み、人々がAIに依存しすぎることは望ましくありませんが、AIが業務の一部を担うことで、人々は議論や学びを深めるための時間を確保できるようになります。このようなAIの活用は、非常に有効であると感じました。初めての英語での

議事録作成とディスカッションは、私にとってとてもハードルが高いことでした。さまざまな国の英語を聞き取ることが難しく、時折、自分だけが取り残されているように感じる場面もありました。しかし、そのような経験を通じて自身の新たな課題が明確になり、とても貴重な学びの機会となったと感じています。このような機会をくださった関係者の皆さまに心より感謝いたします。

会議中の出会い

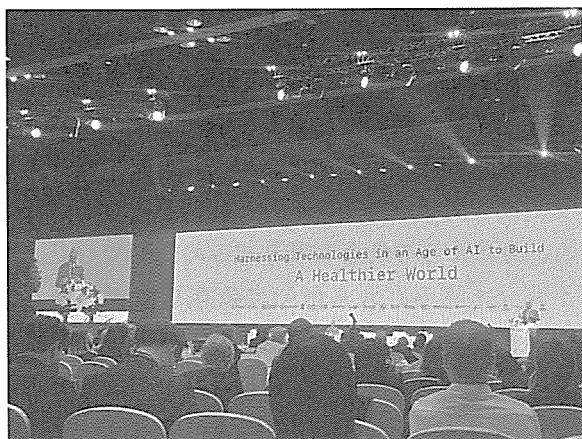
PMACの期間中、新たな出会いがとても多くありました。食事の会場に一人でいると、「どこから来ましたか?」「普段はどのような活動をしていますか?」と会話が始まります。その中で私にとって、とても印象に残る出会いがありました。フィールドトリップのバスを待っている際、偶然隣にいたケニア人ですが、彼はHIV患者のメンタルヘルス維持のためにソーシャルメディアの活用を検討している研究者でした。HIV患者の中には、自身の病を周囲に隠して生活している人が多いのが現実です。相談することで噂が広まるのではないかと不安を抱え、周囲に打ち明けられず悩む患者は、日本でも少なくありません。この状況が世界共通であることを改めて認識しました。依然として根強く残る「偏見」や「差別」が、国連が掲げる持続開発目標の一つであるUHC（ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ）達成の遅れに影響を与えていることは、HIVという疾患の特徴の一つであると感じています。彼の研究は、ソーシャルメディアを活用し、患者が手軽にメンタルヘルス支援を受けられる環境を整えるとともに、

ピアサポートの促進やストレス管理の支援を目的としているようでした。共通の専門分野である「HIV」というキーワードを通じて会話が弾み、尽きることがありませんでした。国際医療協力の分野で業務を遂行するにあたり、専門性を持つことは重要ですが、それにとらわれず多角的な知識を身につけることが、時代に合った適切な介入を検討するうえで役立つということを実感しました。

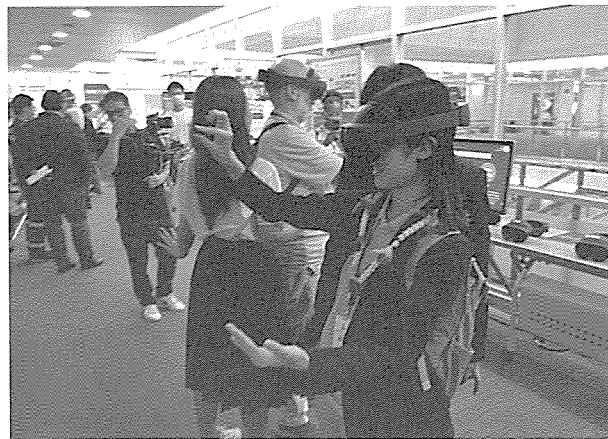
今後の展望と学び

もともとそれほど興味のなかったデジタルヘルスに対しても、世界各国の事例を聞く中で、次第に興味が高まりました。デジタル化が進むことで利便性を感じる人々が増える一方、子どもや高齢者など、取り残されやすい層が生じることが懸念されます。その課題に対応する今後の取り組みとして、コミュニティレベルでの協力体制の構築や、国レベルでのシステム変革の必要性について、繰り返し議論が行われました。世界の動向を先取りして把握することで、戦略的な意思決定や課題への迅速な対応が可能になると感じています。私自身が時代の変化に取り残されることのないよう、今後も様々な分野において積極的に情報を収集し、継続的な成長に努めていきたいです。

タイは、13年前に私が国際協力の世界へ踏み出すきっかけとなり、自身の専門分野を決める契機となった国です。そのような縁のある地に、今回このような形で再び訪れることができたことは、私にとって大変感慨深いことでした。国際協力の分野ではまだ学びの途上にありますが、今後再びこの地を訪れる際に、さらなる自身の成長を感じられるよう、日々研鑽を積んでいきたいと考えています。



PMAC会議の様子



フィールドトリップにてVRを用いた医学教育を体験